

昔むかし、ある父親に、娘が三人ありました。

あるとき、父親は、お祭りに行って、娘たちに金の指輪をひとつずつ買ってやりしました。

ある日のこと、末の娘が泉に洗濯に行きました。金の指輪を傷つけないように、そつとぬいて泉の石の上に置きました。ところが、洗濯を終えると、指輪のことをすっかりわすれて、家に帰ってしまいました。

家に着くと、娘は、指輪を泉にわすれてきたことに気づきました。すぐに、引き返しましたが、指輪はありませんでした。すると、泉のそばに、ひとりのおじいさんがいたので、

「このあたりで、金の指輪を見ませんでしたか」とたずねました。おじいさんは、
「指輪はわしがひろって持っているよ」といいました。そして、大きなふくろを見せて、
「もしあんたがこのふくろの中に入ったら、指輪を返してやろう」といいました。

娘は、指輪を返してほしくて、ふくろの中に入りました。おじいさんは、娘をふくろに入れたまま肩にかつぐと、どんどん歩きだしました。おじいさんは歩きながら娘にいました。

「いいか、わしがおまえに『歌え、歌え、ずだぶくろ。歌わないとなぐってやるぞ』と
いったら、歌うんだぞ。歌わないと、ほんとうになぐるからな」

やがて、ある村に着くと、おじいさんは、会う人ごとに、

「歌うふくろを持っております。さあさあ、歌を歌わせますから、お金を投げてくださ
いな」といって歩きました。村の人たちが集まってくると、おじいさんは、ふくろに向
かっていいました。

「歌え、歌え、ずだぶくろ。歌わないとなぐってやるぞ」

娘は、こわくなって歌いだしました。

泉にわすれた金の指輪

あたしは父さんも母さんもわすれて

ふくろの中で死ぬでしょう

村の人たちは、ほんとうにふくろが歌っているのだと思って、たくさんのお金を投げ

てくれました。おじいさんは、お金をポケットに入れて、次の村へと歩いて行きました。こうして、おじいさんは、村から村へと歩きつづけ、娘はふくろの中で歌いつづけました。

やがて、おじいさんは娘の村にやって来ました。そして、たまたま娘の家で泊めてもらうことになりました。晩ご飯の時間になると、おじいさんは、

「晩ご飯のお金を払う代わりに、ふくろに歌を歌わせましょう」といいました。みんなが食堂に集まってふくろを囲んで座ると、おじいさんはいいました。

「歌え、歌え、ずだぶくろ。歌わないとなぐってやるぞ」

娘は、歌いました。

泉にわすれた金の指輪

あたしは父さんも母さんもわすれて

ふくろの中で死ぬでしょう

父親も上のふたりの娘も、それを聞いて、すぐに末の娘の声だと分かりました。そこで、おじいさんがご飯を食べ終わって酒場へ飲みに出たすきに、娘をふくろの中から出しました。みんなは、娘を抱きしめ、ごちそうをいっぱい食べさせて、ベッドに寝かせてやりました。それから、ふくろの中に、犬とねこを入れておきました。おじいさんは、酒場から帰ってくると、その家に泊まりました。

つぎの日の朝早く、おじいさんは、ふくろをかついで出かけました。となりの村に着くと、さっそく人を集めていいました。

「歌え、歌え、ずだぶくろ。歌わないとなぐってやるぞ」

ところが、ふくろは歌いません。おじいさんは、腹を立ててふくろをなぐりました。すると、ふくろの中で犬とねこがあばれ始めました。おじいさんは、変だと思ってふくろを開けてみました。そのとたん、犬とねこが、おじいさんの顔めがけて飛び出して来ました。犬は、おじいさんの鼻にかみつきました。ねこは、おじいさんの顔じゅうひっかきましたとさ。

おしまい

村上郁再話

資料『スペイン民話集』三原幸久／岩波書店